



小さなことを積み重ねよう

いつも学級通信を楽しみにしています！家族間でも話題にして会話が弾むので楽しいです^^

昨日の朝、あるお家の方からこのようなメッセージが送られてきました。

「渡辺先生、もうすぐ100号ですね。」

昨日の放課後、ある先生からもこのように伝えてもらいました。

「楽しみにしています」「読んでいます」の一言だけで、書いている側としてはこの上なく嬉しい気持ちになりますね。

おかげさまで、Venture fourthは本日節目の100号を迎えました。

クラスがスタートしておよそ6か月。

子どもたちの挑戦や成長と共に歩んできた通信も、ついに100の足跡を重ねることになりました。

1年間の登校日数はおよそ200日間ですから、ちょうどその中間点、折り返しを迎えている時期であることがわかります。

ちなみに私が初めて書いた学級通信は、17年前に発行しました。

タイトルは、「とん汁」。(笑ってしまうようなタイトルです。)

受け持っていたクラスは、当時2年1組でした。

先日その時の卒業生が遊びに来たこともあり、クラスでも「その通信を見たい！」と声が上がったため、久方ぶりに棚から取り出してみました。

表紙には、薄れた印字と写真。

今では立派な社会人になって活躍しているかつての教え子たちが、ぼろぼろになった台紙の中ではじけるように笑っています。

中を開けば、直視できないほどの下手くそな文章が並んでいます。

そのページを繰る度、思わず頬がほころびます。

なぜなら、そこにはかつての駆け出し時代の自分の葛藤や努力の道のりのはっきりと表れているからです。

私は、根っからの作文嫌いであり、かつ筆無精でした。

今、この話を周りにするとよく冗談だと思われることがあります。

でも、事実であるから仕方ありません。

この学級通信「とん汁」の号数がすべてを物語っています。

17年前の当時、一枚の学級通信を作成するのに数時間を要していました。

いざ机に向かっても、遅々として作業が進まない。

うまい言葉が出てこない。

いい表現が見つからない。

頭を抱えながら、ただ時間がどんどん過ぎていく。

考えている内に睡魔が襲ってくることもしばしばでした。

結果、一学期終了時点で書いた号数は「13」。

一学期終わりの懇談会で、

「もっと学級通信が読みたいです。」

と、あるお母さんに言われたことを今もよく覚えています。

ただ、この一言をきっかけに奮起することができました。

まずは、ブレークスルーに必要な「100」を目指そう。

そう決意して、二学期からさらに筆に力を入れるようにしました。

ただし、作文嫌いは相も変わらずです。

思うような文が浮かばず、中には休日を半日ほど使って書いたものすらありません。

その時、職場の先輩から次の言葉をもらいました。

若いうちは、次の「3つ」をかくことが大切なんだよ。

一つは「汗」、一つは「恥」、そしてもう一つは「文」。

この3つをかくことで、教師の力が高まって磨かれていくんだ。

文章作りに苦心していた私にとって、驚くほどストンと落ちる言葉でした。教師になりたての私は、とにかく行動して汗をかき、失敗を恐れず挑戦して恥をかいて、そして特に苦手な文章を一所懸命書こう。

そう思えたのです。
結果、1年目は100号に何とかたどり着きます。
翌年、教師2年目。
次なる目標は、「日刊」としました。
毎日の発行です。
1年間の登校日数は約200日。
毎日書けば、前年度の倍の通信を書くに至ります。
もちろん、しんどさも倍でした。
それでも、どうにか3月20日までの一年間を書ききりました。
不思議な高揚感がありました。
文章嫌いの私でも、毎日書くことは可能だと分かったからです。
調子に乗った私は、3年目の目標を「400」としました。
前年の再び倍です。
毎日およそ2枚ペースで書き続けた。
この頃から、お家の方からお手紙を頂けるようになりました。
「毎日読んでます。」「〇〇の内容が面白かったです。」
少しずつ寄せられるようになった感想の声を聴き、書くこと徐々に楽しくなってきた頃です。
最終的に、3年目に書いた号数は446。
人間、やればできるものだなあと思ったものです。
そんな風にして、今日までの18年間を過ごしてきました。
今では、特に「号数」の目標は置いていません。
ただ、毎年何らかの目標には挑戦しています。
今年は、おうちの方からのお便りだけで作る「親通信」を発行しようとか、
今年は新企画を年内に3つ作り出そうとか、それは様々です。
4年前は、公立小学校で「もう一度だけフルパワーで学級通信を書いたと
したら、いったい何枚書けるのか」を試してみたこともありました。
その年は、1年間で1001枚の通信を書きました。
それでも尚、余力がありました。
実感としては、「まだまだ書けるな」という感じです。
そして、初任のころに先輩から贈ってもらった「汗かけ恥かけ文をかけ」
という言葉は、今年の春に本になりました。
それくらい、自分の中でずっと大切にしてきた言葉だということです。



質量転化の壁 ※「恥をかく舞台」を自分でつくり上げていく ※授けのチャンスを選ばない ※インプットとアウトプット ※全員達成をなぜ目指すのか ※恥を懼くとは在り方を離くこと ※本の買い方 ※教師の学び方へ起きた変化 ※原体験を渡し続ける...etc

解説 藤原友和氏 著

カリスマ教師が初めて明かす
突き抜ける秘訣

文を書くようになって最初に気づいた変化は、子どもたちの成長をみとる視点が広がり、変化を見取るスピードが速くなったということでした。

子どもたちの行動や言動を見聞きして「ああ、とってもいいなあ」と思うことはあっても、それが何故いいのか、どうして価値があるのかを、22歳の私は言語化することが容易にはできませんでした。

でも、文を書き続ける中で、子どもの行動の価値を様々な角度から表現できるようになるなど、自分の思う「いいなあ」を様々な方法で伝えられるようになってきたことは、自分にとって大きな喜びでもありました。

現在、書き溜めてきた学級通信は約1万枚になりました。

今改めていろんなことを振り返って思うのは、やはり人間何事も「決めつけ」「思い込み」はよくないという事です。

私は、今では文章を書くことが楽しくてたまりません。

文章力はどこまで伸びたかわかりませんが、少なくとも一枚の通信にかかる時間は激減しました。

一年目、二年目は睡眠時間を削りながら必死に書いていた文章が、今では学校の休み時間ですべて事足りるようになっていきます。

17年前の自分が見たら、さぞかし驚くでしょう。

以前話した、「音楽」のこともそうです。

中学校まで大嫌いだった音楽は、今や私のライフワークの一部になっています。

毎日のように、バイオリンを弾き、三線をかき鳴らし、ギターに興じています。

楽器に囲まれた生活を送るなど、小学生時代の私が知ったら腰を抜かすに違いありません。

文章嫌い、音楽嫌いは、結局私が勝手に「思い込んでいた」だけでした。

「決めつけ」「思い込み」はよくない、と改めて思います。

それは、自分自身の力や成長にブレーキをかけ、制限してしまうことにつながるからです。

「小さいことを積み重ねることが、

とんでもない所に辿りつくただ一つの道」

イチロー選手の言葉です。

私はこの言葉が大好きで、学級通信を書きながら頭によく思い浮かべます。

通信1枚1枚のもつ意味や力は、限りなく薄いです。

これは、紛れもない事実といえます。

1枚書いた所で、子どもたちが劇的に変化するわけではありません。

2枚書いた所で、クラスが見違えるほど成長するわけでもありません。

もっといえば、10枚書いても20枚書いても、目に映る状況はほとんど変わらない事の方が断然多いです。

「通信を書く」という行いは、クラスにとってみれば極めて小さく、些細な事なのです。

でも、「小さいこと」だからこそ、積み重ねることに意味があると思います。

積み重ねる中で、ほんの少し、わずか1ミリでもクラスや子どもたちの背中を押す力になれば、という思いで18年間書き続けています。

そうしていると、いつしか不思議な出来事が起きてきます。

嫌いだった文章が、少しずつ好きになってきたり。

「通信を読んで涙が出ました」なんてお便りももらえるようになったり。

不登校だった子が、学級通信をきっかけにして登校を始めたこともありました。

そして、学校の枠を飛び越えていろんな方から声をかけていただけるようにもなりました。

今回の「汗かけ恥かけ文をかけ」の本も、編集者の方から「ぜひその初任のころからのお話を書籍化したいです！」とのオファーを受けて実現したものです。

頑張っている姿は、誰かが見てくれているのだと改めて思います。

みんなにとっても、苦手なこと・不得意なことがあるでしょう。

けれど、どうかそれを「どうせできない」と決めつけないでください。

「自分はどうせだめだ」などとも思い込まないでください。

なぜなら、未来のことなど誰にもわからないからです。

決めつけない・思い込まない限りは、みんなの可能性は無限に広がっていきます。

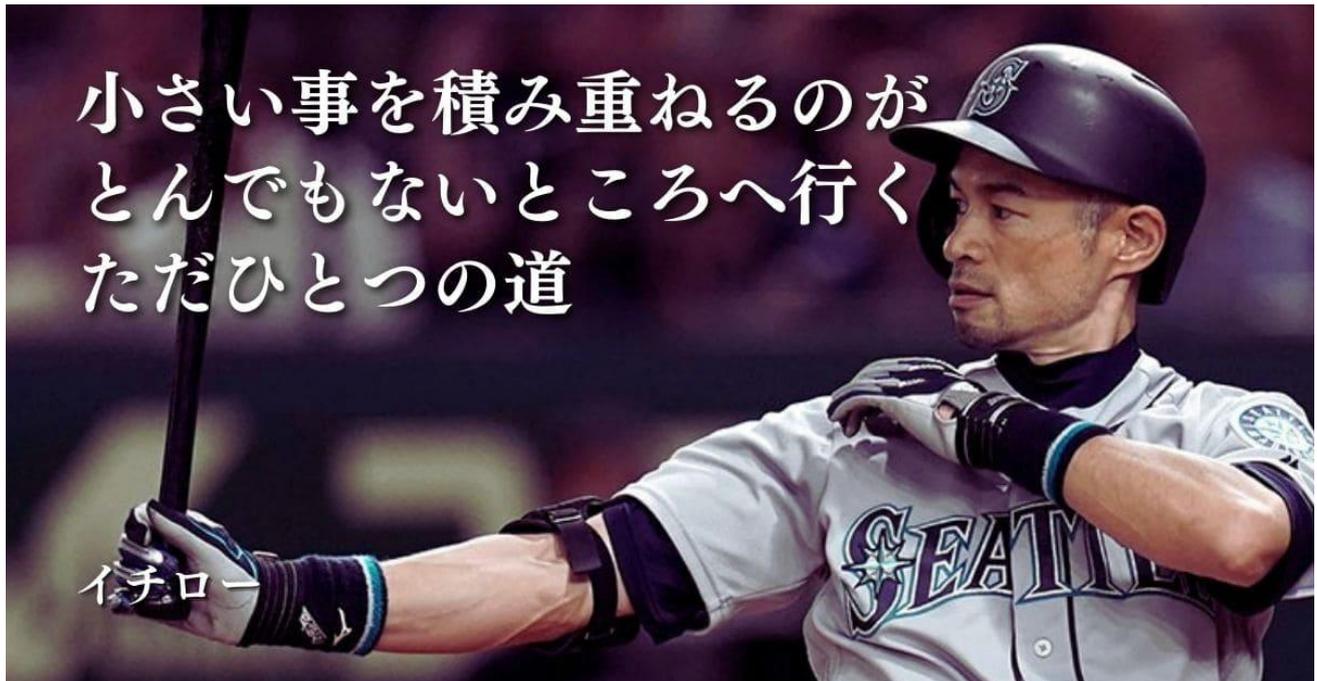
そして、もし何か挑戦してみたいことが見つかり、目標を定めたとしたら、まずは「小さなこと」を積み重ねていってみましょう。

コツコツ積み重ねる中で、必ず不思議なことが起きてきます。

その頑張りを見ている誰かが、必ず応援してくれるようになります。

小さなことを続けた先に、自分でも驚くくらいの大きな出来事が待ち受けていたりもします。

積み重ねた先に見える素晴らしい景色、一緒に見てみませんか？



改めて、100号までお付き合いいただいた皆様、ここまで本当にありがとうございました。

「Venture fourth」は、サム先生が名付けてくれたタイトルです。

「挑戦しよう、そして前へ前へと進もう」という意味です。

私自身も子どもたちと一緒に、これからも小さくとも確かなことに愚直に挑戦を続け、それを一つ一つと積み重ねていきたいと思います。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

